中国小説『紅楼夢』にみえるコミュニケーション・ストラテジー
―王熙鳳の場合―

池 間　里 代 子*

1．はじめに

本稿は、中国清代中葉に書かれた白話（口語）小説『紅楼夢』にみえる王熙鳳（オウキホウ）という女性から発せられた言葉を中心に、彼女のコミュニケーション・ストラテジーについて観察し、その意義を考察するものである。

『紅楼夢』は日本の『源氏物語』とよく似ていると言われ、現在盛んに比較研究が国内外で行われている。[1] もちろん、作者執筆の時空が異なることから直接的な影響関係はないが、物語の舞台や登場人物の描き方などに類似性を見ることができ、比較文学のアメリカ学派的な観点[2]から論じられることも多い。ゆえに、『紅楼夢』の内容を紹介する場合にしばしば「中国の『源氏物語』のようなもの」であると紹介し、逆もまた然りである。

『紅楼夢』の研究は当初「モデル探し」が主流だったが、中華民国に入ってから胡適（コテキ）（1891 年－1962 年）ら新紅学派は「作者の人生をありのままに描いた自然主義文学である」と提唱した。これに対しマルクス主義の文学者から「ブルジョア階級主観唯心主義」だとする批判が起こり、中華人民共和国成立後の 1950 年代に紅楼夢論争が勃発した。建国の父である毛沢東（1893 年－1976 年）も『紅楼夢』を愛読したが、公式には「紅楼夢は歴史政治小説として読むべきである」と述べるに留まった。1954 年に毛沢東が中共中央政治局員等の幹部に送った「紅楼夢研究問題に関する書簡」の中で「兪平伯（ユヘイハク）（紅楼夢研究者：1900 年－1990 年）は胡適派資産階級の唯心論の影響を受けたブルジョア知識分子」であるから「青年を害する誤った思想」を批判すべきであることと、兪平伯の唯心論を容認すると「ブルジョア作家と観念論の面で統一戦線を結び」「資産階級の捕虜となったこと」について言及した。結局、兪平伯の「紅楼夢簡論」に対し、山東大学学生だった李希凡（リキハン）（1927 年－）と藍翎（ランレイ）（1931 年－2005 年）の二青年が「『红楼梦简论』及其他（『紅楼夢簡論』その他について）」論文を執筆し、マルクス主義リアリズムの観点から、『紅楼夢』は封建社会の崩壊過程を描いたリアリズム文学であり、作中人物は封建支配者に反抗した典型として描かれ、醜い現実に対して批判的・否定的傾向をもつものであると主張し、兪平伯を批判した。

このように、政治闘争にも巻き込まれた紅楼夢研究であるが、その反面、文化大革命中（1966 年－1976 年）であっても研究が進んだという事実もあった。

本稿執筆者は卒業論文を皮切りに、修士論文・学会紀要などに『紅楼夢』に関する論考を断続的に発表してきた。今回取り上げるのは王熙鳳という女性のコミュニケーション・ストラテジーである。彼女は富貴な王家に育ち、より富貴な賈（カ）家へ嫁した。ただ、封建社会の一種の常識として女性ゆえに高い教育を受けなかった。そのために口頭語―本稿ではとりわけ歇後語（ケツコウゴ）（しゃれ言葉）と諺

* いけま　りよこ　十文字学園女子大学（教授）／日本大学文理学部（非常勤講師）

の引用に着目する―の多様性と鋭さに特徴がみられる。作中、皆を笑わせようとする場面、怒鳴りつける場面、同情する場面ごとに王熙鳳が効果的なしゃれ言葉や諺を使うのは非常に戦略的であり、また彼女の性格を活写している。

本稿で使用したテキストは、原文を『紅楼夢』上中下（1982年、人民文学出版社）・翻訳を『紅楼夢』上中下（伊藤漱平訳・昭和48年、平凡社）である。

2.『紅楼夢』と王熙鳳について

『紅楼夢』は中国五大小説[3]の一つである。清の高宗（在位1736年－1795年）の乾隆56年（1791年）辛亥の年に初めて刊行された。30年以上にわたって写本で行われた時期を通算するとおよそ200年前に成立したと考えられる。作者と言われる曹霑（字は雪芹）は元貴族の子弟であり物語は一族の繁栄と没落、そして復活をなぞったものとされている。『紅楼夢』は曹霑の親族による評（感想、同意、批評などを原稿に書き込むこと）に従ってリライトしているうちに、完成を見ずに彼が早逝、その原稿を入手した高鶚（字は蘭墅）によって後半部分が続作されて出版された、という成書経緯がある。章回小説[4]の体裁を取って書かれ、全120回のうち前80回と後40回の作者問題が議論されている。[5]また、旧名を『石頭記』『金陵十二釵』『情僧録』ともいい、現在は『紅楼夢』という名に統一され世界各国で翻訳されている。日本では大正9年－11年に『國譯紅樓夢』が幸田露伴・平岡龍城の共訳で出版され、昭和47年－60年にかけて松枝茂夫訳（岩波書店）、昭和48年に伊藤漱平訳（平凡社）、平成25年－26年に井波陵一訳（岩波書店）が出版された。（以上、全訳。部分訳や抄訳も複数存在する。）

王熙鳳については、「金陵十二釵正冊」の判詞[6]および紅楼夢第九曲で、（夫）賈璉に離縁されて泣く泣く金陵に帰ることが暗示されている。また、脂硯斎（曹霑の親族と考えられる者）の評によれば、第81回以降に「王熙鳳知命強英雄」の回があり、その死に臨んで再び瘡頭の僧が現れ、熙鳳は自らの天命を悟って潔く死んでいくことになるようだ。判詞にある「一従二令三人木」は「人木＝休」として、始めは賈璉に「従」い、次第に「冷」淡となり（または命「令」し）、最後は「休」つまり離縁されたとものとする説が有力なようだが、他にも諸説あり梁帰智は「二令三人木」は「冷人来＝冷人（柳湘蓮）が来る」と解釈して、緑林の徒となった柳湘蓮が張華とともに尤姉妹の仇を取ろうと動き、熙鳳がこれに敗れることを暗示したものだとしている。

さらに、「王熙鳳は『紅楼夢』の主要な人物で、賈璉の正室、巧姐の生母であり、また賈宝玉（作品中の主人公）の父方の嫁であり従姉でもある。あだ名を鳳辣子といい、また璉の奥方さま、とも呼ばれ栄国府における事実上の当主の妻である。周汝昌（1918年－2012年：『紅楼夢』の研究者）は、『紅楼夢』のストーリー・プロットは大きく二つあり、一つは賈宝玉を中心とし、いま一つは王熙鳳を中心としたものである、とみなしている。[7]」と紹介されている。（和訳は池間、原文は注）

王熙鳳は若い世代の嫁として「口八丁手八丁」という人物形象として登場する。一族のゴッドマザーである賈母（史太君）に可愛がられ、その後ろ盾をもって冠婚葬祭に腕力を揮う。また、農家の劉ばあさんによくしてやった恩返しとして一人娘の良縁を得る。しかし、華やかな表の顔とは裏腹に裏では裏金作り・殺人教唆・自殺強要などのよろしくない事に手を染め、自分を邪魔する者には容赦ない。ゆえに「辣子（トウガラシ）」とも称されるのである。特に、賈母などの目上へのハ

キハキした話しぶり、ジョークを交えた面白い口のきき方、身分が低い者や敵認定した者への辛辣なもの言いに大きな特徴を持っている。そのバリエーションは『紅楼夢』登場人物の中で最も多く、かつ量が多い。

王昆侖（オウコンロン）（1918年－1985年）『紅楼夢人物論』[8]の「王熙鳳論」によると、王熙鳳は「中国古典作品の中で、このような強烈な腕力でもって書かれた人物形象はない」[9]し、彼女は「聡明で、美しく、能力が高く、辛辣な『鳳辣子』」[10]（和訳は池間、原文は注）であるとしている。また、「作者の筆の下で生き生きと活躍した人物である」（和訳は池間、原文は注）との評価をしている。日本では船越達志が「悪女的形象」として賈瑞（カズイ）を死に追い込んだことと、尤二姐を自殺に追い込んだ2点を論拠として挙げている。[11]

本稿は、王熙鳳が生き生きと描かれている理由の一つとして、すらすらと口をついて出るしゃれ言葉や諺の多さに由来しているのではないかと仮定し、他の登場人物との量的な差異を指摘し、その効果と豊富さの原因について考察するものである。

なお、参考文献に挙げた論文集は1980年代・90年代に中国で発行されたものであるが、資料収集法や論考に緻密さが欠けているため今回は参考に留め、実際の作表などは池間が一人で行った。

3．王熙鳳のコミュニケーション・ストラテジー―「歇後語」と「諺」の使用と分析―

3－1－1. 歇後語について

本項では池間論文「『紅楼夢』における歇後語について」を先行研究とする。[12]歇後語は「しゃれ言葉」と和訳されており、上の句で下の句の意味を推測させるものを言う。すなわち、下の句を言わなくても言わんとする意味が理解されるので「歇後（後を休む）」というのである。日本の謎かけ「何々と掛けて何と解く、その心は―」に類似するレトリックで、前半を「提示節」、後半を「解き」などという。日本における歇後語研究は鳥居久靖『金瓶梅（キンペイバイ）しゃれことばの研究』（昭和47年、光生館）が著名だが、『紅楼夢』の歇後語については従来あまり議論されておらず、紅楼夢研究を網羅している『中国红学概论』[13]においても半ページほどに8例しか収録していない。

そこで、『紅楼夢』全120回から歇後語だと思われるものをピックアップし、『紅楼夢』における歇後語の特徴を探り、さらに話者ごとに集計して考察を試みる。本稿では特に王熙鳳が用いた歇後語について注目する。

3－1－2. 『紅楼夢』にみえる歇後語の特徴

『紅楼夢』120回のうち、歇後語は98例得られた。このうち、特徴的なものを挙げる。

「烧糊了的卷子－长得冒丑。」（焦げついた捲子（ジェンツ）―醜いばかり。）

第46回：王熙鳳／第51回：王熙鳳

である。これは2回とも王熙鳳が嘆いてみせる場面で用いられ、「烧糊了（焦げた）」と自らを形容しており、王熙鳳の気性が強く全てが過剰であることを自覚しているかのような表現である。聞き手は苦笑せざるを得ない。

「美しい」という場面では：

「调理的水葱儿－长得出息。」（四本の行者にんにくみたい―お立派です。）

第48回：王熙鳳／第49回：晴雯（セイブン）

という表現をしている。しかし、スクっとしている例えが「行者にんにく」というところがやや鄙な印象を受ける。辞書には「花茎が7月ごろのびだして30〜50センチにも達し、のびかたが早くすっきりと高いので児女の生長の聡明で美しいのにたとえられる」とある。

「恐ろしい」場面では：

「去虎头上捉虱子－不敢冒死。」（虎の頭のしらみ取り―死にたくない。）

第83回：夏金桂（カキンケイ）／第84回：趙姨娘（チョウイーニャン）

が用いられ、同様の表現に「虎嘴上拔毛－危险。（虎のひげを抜く―あぶない。）」が現代でも使われている。

「憐れむ」では：

「兔死狐悲－物伤其类。（兎死すれば狐悲しむ―同類あい憐れむ）」

第57回：林黛玉（リンタイギョク）／第82回：襲人（シュウジン）

があり、兎は中国で「逃げ足が速い、ずる賢い」というメタファーがあるため、兎と狐を同類とみなした表現である。同時に「兔死狐悲－掉的不是同情泪。（兎が死すれば狐悲しむ―同情したフリ。）」という「解き」もあり、こちらは草食の兎と肉食の狐は小動物という共通点があるものの、互いに干渉しないことから「同情したフリ」という結論になっている。『紅楼夢』の2例はいずれも前者の用法である。

また、『金瓶梅』にも登場した歇後語が3例あった。

①「清水下杂面－你吃我看见。」（水の中のうどん食べるなら食べてみよ―見るだけで食べられない。）

第65回：尤三姐（ユウサンシャ）

②「见提着影戏子上场－好歹别戳破这层纸。」（影絵芝居の人形を手に舞台に上る―この紙だけは突き破ってはならぬ。）

第65回：尤三姐

③「耗子尾巴上长疮－多少脓血儿。」（鼠の尻尾にできた瘡―なにほどの膿も出ぬ。）

第68回：王熙鳳

これらは明清時代に流行したものとみられ、現代の辞書類には見当たらなかった。とりわけ尤三姐が用いた①②は、賈家の好き者たちに手籠にされそうになった際の啖呵であり、威勢よくポンポンと繰り出す歇後語が彼女の人柄を活写している。

『紅楼夢』にみえる歇後語を総括すると、喜怒哀楽など多方面で用いられ、自虐的なもの、遠回しなもの、啖呵を切るための装飾的なもの、暗示性のあるもの、など多種多様であった。これらの歇後語を登場人物の口から語らせることによって、個性を際立たせたり、話者のテンポに緩急をつけたりする効果があると考えられる。

3－1－3. 歇後語の話者

次に、歇後語の話者について考察してみたい。下表は今回得られた98例を話者ごとに分類したものである。全体は「女3：男1」の割合となっており、その中で王熙鳳（28例）が群を抜いて多く、全体の3分の1を占める。次に目立つのは女中（21例）である。小説中登場回数が多く、作中お喋りな印象だった賈宝玉・史湘雲（シショウウン）・晴雯らは意外にも1例ずつしか見られなかった。

女主人	贾母 2	王夫人 5	尤氏 1	李纨 2	王熙凤 28	薛宝钗 5	黛玉 1	史湘云 1	尤三姐 4	金桂 1
女老人	李嬷嬷 1	赵姨娘 1	柳氏 1	鲍二妻 1	王住妻子 1	婆子 1				
女中	鸳鸯 5	平儿 4	袭人 3	晴雯 1	紫鹃 1	金钏儿 1	春燕 1	彩霞 1	芳官 1	灯姑娘 1
女其他	刘姥姥 1									
男主人	贾政 2	贾珍 1	贾琏 4	贾蓉 1	贾宝玉 1					
男小者	焦大 2	茗烟 1	包勇 1	李十儿 1						
男其他	迎春夫 1	王大夫 1	曹雪芹 1							
其他	众人 2	地の文 1	众丫头 1	丫头 1						

3－1－4. 王熙鳳が用いた歇後語

では、王熙鳳が用いた歇後語はどのような特徴があるか、用例を挙げ分析を行う。

	中国語	和訳
第 9 回	一龙生九种－种种各别	一匹の竜から 9 通りの子―9 匹みなちがう
第 16 回	坐山观虎斗－坐收其利	虎の喧嘩を高見の見物―濡れてで粟
	借剑杀人－不露痕迹	借りた剣で人殺し―痕跡を隠す
	引风吹火－费力不多	風を入れて火をあおる―お茶の子さいさい
	站干岸－不沾事（湿）	むこう岸の火事―かまいつけぬ
	推倒油瓶不扶－懒到家了	油壷をおし倒して起こしもせぬ―面倒くさい
	吃着碗里看着锅里－贪心不足	お椀のものを食べながら、お鍋のなかが気にかかる―貪欲
	马棚风－不当一回事	「厩の風」かなにかみたい―見向きもしない
第 25 回	吃了我们家的茶－给我们家作媳妇	うちのお茶をのんだ―うちのお嫁にきてくれる
第 29 回	打墙也是动土－大干小干都一样	塀を筑くにも地鎮祭―小事も大事も同じ手間
第 30 回	黄鹰抓住了鹞子的脚－亲密不可分	大鷹がはい鷹の脚をひっつかみ―親密
第 46 回	调理的水葱儿－长得出息	水べの行者にんにく―すらりと美しい
	烧糊了的卷子－长得貌丑	焦げついた捲子―醜いばかり
第 51 回	烧糊了的卷子－长得貌丑	焦げついた捲子―醜いばかり
第 54 回	聋子放鞭炮－散了罢	聾の爆竹鳴らし―散るばかり
第 55 回	小冻猫子－热灶炕让他钻去	凍(かじ)け猫も同然―竈か炕に火が入ったらもぐりこませておけ
第 68 回	顶梁骨走了真魂－下得要命	脳天から魂もなにも抜け出たかのよう―びっくり仰天
	癞狗扶不上墙的种子－无法支持	瘡かき犬は後押しがあっても垣には登れぬ―無駄な後押し
	锯了嘴子的葫芦－没口齿	口を鋸びきにされたふくべも同然―ただただ小心翼々
	膊折了往袖里藏－自掩苦处	腕の折れたは袖にて隠し―臭いものには蓋
	耗子尾巴上长疮－多少脓血儿	鼠の尻尾にできた瘡―なにほどの膿も出ぬ
	借剑杀人－不露痕迹	借りた剣で人殺し―痕跡を隠す
	坐山观虎斗－坐收其利	虎の喧嘩を高見の見物―濡れてで粟
	鸡儿吃了过年粮－手头紧	鳥が翌年の餌を食べこむ―手元にゆとりがない

	中国語	和訳
	前人撒土迷了后人的眼－迷眼	さきの者が砂撒けば、あとの者が眼つぶし食う―目がくらむ
	没缝儿的鸡蛋还要下蛆－没根据的谎话	裂け目のないところにまで蛆を生みつけ―根拠のない噂
	膊折了往袖里藏－自掩苦处	腕の折れたは袖にて隠し―臭いものには蓋
第88回	和尚打伞－无发（法）无天	坊主が傘をさす―髪（法）もなければ天もない（みえない）

王熙鳳が用いた歇後語には動物が多く登場する。これは、歇後語の特徴の一つでもあるが、身近にいる動物の性質を利用してユーモアや婉曲表現を可能にしている。例えば第16回の「虎」は獰猛さ、第30回の「鷹」は握力の強さ、第55回の「猫」は寒がり、第68回の「鼠」は身体が小さいことを借りてユーモラスな表現にしている。その他には「失敗」を盛り込んだものがある。第16回「油壷を倒す」、第46回と第51回にみえる「焦げついた捲子」、などがそうだ。

また、諺もそうだが第68回に集中している。これは結論でも述べるが王熙鳳の夫が密かに妾を囲ったことが露見した回である。そのために「驚き」「怒り」「嘆く」シーンで歇後語を多用しているのである。つまり、騒ぎが起きた時に相手だけではなく観衆へも自分の不遇・不幸・不満を声高に喚くのに、歇後語はうってつけだったのだ。ここでは、「つい口をついて出る」というレベルではなく戦略的に（これを言ってやろう）と意図して発言していることが分かる。つまり、心の準備がすっかりできたうえでの用意周到な罵声なのである。

3－1－5. 王熙鳳の「笑い話」にみえる歇後語

第54回にみえる「聋子放鞭炮－散了罢」（聾の爆竹鳴らし―散るばかり）は、王熙鳳の笑い話が下敷きになっている。以下にその部分を挙げる。

…凤姐笑道：“再说一个过正月半的。几个人抬着个房子大的炮仗往城外放去，引了上万的人跟着瞧去。有一个性急的人等不得，便偷着拿香点着了。只听‘噗哧’一声，众人哄然一笑都散了。这抬炮仗的人抱怨卖炮仗的捍的不结实，没等放就散了。”湘云道：“难道他本人没听见响？”凤姐儿道：“这本人原是聋子。”众人听说，一回想，不觉一齐失声都大笑起来。又想着先前那一个没完的，问他：“先一个怎么样？也该说完。”凤姐儿将桌子一拍，说道：“好罗唆，到了第二日是十六日，年也完了，节也完了，我看着人忙着收东西还闹不清，那里还知道底下的事了。（中略）外头已经四更，依我说，老祖宗也乏了，咱们也该‘聋子放炮仗－散了’罢。”

…熙鳳は笑いながら、「では、もう一つ元宵にちなんだお話しをいたしましょう―何人かの者が家ほどもある大爆竹をかついで、郊外まで鳴らしに出かけました。それっというので、万にものぼる人たちがぞろぞろあとについて見物に出かけました。ところが気の短い人間もいればいたもので、待ち切れずにこっそり線香の火で点火してしまったのです。さあ、とたんに『パアン』と音がする。野次馬はどっと笑い、みな散り散りになってしまいました。その爆竹を「かついでいた男のこぼすには、チェッ、爆竹売りめが火薬のこぼれどめをしっかりしておかないものだから、鳴らさぬうちに散り散りになってしもうた……」すると湘雲が口を出し、「まさか当人がその音を聞かな

かったはずはないでしょ？」「いえ、なに、当人が実は耳が遠かったので」と、熙鳳。一同はそういわれてもなお考えていましたが、しばらくして思わずどっと笑いだしました。そこでまた前の分（さる大家庭でにぎやかに元宵説を過ごしていた、という話）には落ちがついていなかったことを思い出し、熙鳳に向ってたずねました。「はじめのあの方はどうなのです？やはり落ちをつけていただきませんとね」熙鳳は卓子を「ポン」とたたき、「やれやれ、面倒くさいといったらない！そのあくる日はつまり16日でしょう、お正月も終わった、お節句も済んだとなれば、わたくしには道具類を納（しま）いこむ世話焼きの大仕事が控えていて、それだけでてんやわんやのありさま、とうていそのさきのことなど知るわけがありませんわ。（中略）外の模様では、もう四更（朝の二時）時分にもなろうかと存じます。いかがでしょう、お祖母さまもお疲れのご様子、わたくしどももこの辺で『耳の遠いが爆竹鳴らし―散るばかり』もう散るといたしては」

ここで分かるのは、相当手の込んだ歇後語の使い方をして一同を笑わせながら無事に宴を開く、その手練手管である。つまり、笑い話①は「落ちのない話」である。皆くびをかしげていたところ、笑い話②が繰り出され、この落ちが「聋子放鞭炮－散了罢」（聾の爆竹鳴らし―散るばかり）である。一同が笑い話①の落ちを求めると、「もう遅いから解散しましょう、聾の爆竹鳴らし―散るばかり」とやって笑い話①と笑い話②が繋がっていることが判明するのだ。

このような2段階に分けて話し、さらに歇後語を伏線として用い、皆を無事に解散させる手法は、決して咄嗟にできるものではない。楽しい宴をもっと盛り上げつつも解散するために、あたかも漫才のネタ作りと同様のことを予め仕込まなければできない芸当である。作者によって造型された王熙鳳の口八丁という特徴が、よく表現されている場面であると同時に彼女のコミュニケーション・ストラテジーの効果がみてとれる。

3－1－6.『紅楼夢』から発想された歇後語

ウエッブサイトなどで『紅楼夢』関連歇後語が9例得られたので、以下に挙げる。

①「贾宝玉的丫环 — 喜（袭）人。」（賈宝玉の女中―人を喜ばせる）

襲と喜が同音（xi）であることから、襲人という人名と「人を喜ばせる」を掛けて言ったもの。

②「王熙凤害死尤二姐 — 心狠手毒。」

（王熙鳳が尤二姐（ユウジシャ）を死に追いやる―悪事をたくらみ実行する）

王熙鳳は、夫の賈蓮が内緒で娶った妾の尤二姐に嫉妬して、初めは穏やかに接していたものの、だんだんと食事もろくに与えない、精神的に追い詰めるなどして病気にし、生金服用自殺にまで追い込んだ。王熙鳳はこれ以外にも間接的な殺人を犯している。

③「刘姥姥出大观园 — 满载而归。」

（劉ばあさんが大観園から出てくる―土産満載で帰る）

④「刘姥姥进大观园 — 眼花缭乱。」

（劉ばあさんが大観園に入っていく―目がかすむほどの豪華さ）

③④ともに、劉ばあさんという百姓が賈府を頼って上京し、賈母に気に入られて大観園での宴会に招かれたり、持ち切れないほどの土産をもらったりしたことを言ったもの。劉ばあさんは、

物語の終盤で王熙鳳の一人娘を救出し恩人になる。

⑤「林黛玉葬花 ― 自叹命薄。」（林黛玉（リンタイギョク）が花を弔う―薄幸を嘆く）

桃の落花を花鍬で集め、塚を作って供養した林黛玉は、自らも薄命であった。

⑥「贾宝玉住在小西屋 ― 到哪儿说哪儿。」

（賈宝玉が西の小部屋に住んでいる―行く先々で話しをする）

大観園に住む賈宝玉は色々な部屋を訪ねては話しこんでいた。

⑦「正白旗的曹雪芹 ― 真个别。」（正白旗（セイハクキ）の曹雪芹―実に個性的だ）

曹雪芹は『紅楼夢』の作者と言われており、その身分は満軍正白旗であった。その彼が作った『紅楼夢』はいままでにない、個性的な作風だという意味。

⑧「小葱拌豆腐 ― 清的清白的白。」（浅葱で豆腐を和える―白は白、黒は黒）

第74回で「のろま姉や」が園内で拾った春画の刺繍入り香袋を王夫人が手に入れ、これがきっかけで園内を検めることになり、結果的に晴雯が追放された。王夫人が清廉潔白で行動力あることを言ったもの。

⑨「含着骨头露着肉 ― 吞吞吐吐。」（骨を含んで肉を現わす―口ごもる）

賈芸（カウン）が仕事をもらおうと王熙鳳に貢物を持って行くが、気を持たせたきりで即答しない。第88回にみえる。

中国では『紅楼夢』は古くから越劇・芝居・映画・テレビドラマあるいは連環画（挿絵つきの豆本）などが制作され、人々に愛好されてきた。多くのファンを持ち、毛沢東もその一人であったと伝えられている。これらのファン「紅迷（ホンミー）」が創った歇後語ではないかと想像する。

3―1―7.『紅楼夢』における歇後語と灯謎（とうめい）との関係

『紅楼夢』ではさまざまな行事が描写されているが、元宵節が合計4回出てくる。[14] そのうち第22回で灯謎が作られている。灯謎とは、中国の風習で旧暦1月15日の夜、謎々を書いた提灯を野外に吊るし、答えを投函して当たった者に褒美が出る趣向である。その灯謎と歇後語との関連性について見てみる。

①「猴子身轻站树梢…打一果名。」（猿は身軽に枝に立つ―果物の名前を）

答「荔（lì）（立（lì））枝（zhī）」

②「身自端方，体自坚硬。虽不能说，有言必应。…打一用物。」（かっこうは四角にて、からだならかちかち。口こそ利けぬけれど、いえば必ず答える―手まわりの品）

答「硯（yàn）（言（yàn））台（tái）」

2例ともに前半の灯謎が「提示節」であり、答えが「解き」に相当する。ただし、歇後語との違いは「打一果名（果物の名前を）」「打一用物（手回りの品）」のようにヒントがあることだ。ただし、灯謎もレベルが高くなると絶句や律詩のような形で出題し、ヒントが無い場合もある。実際に『紅楼夢』ではこの後5作品が披露されているのだが、縁起の悪いものばかりが続いて賈政が気落ちしてしまう。

①では「立枝」と「荔枝」が同音（掛け言葉）である。これは謎々でもあり、歇後語としても成立しそうだ。②も「硯」と「言」とが同音（掛け言葉）である。提示節の部分が絶句になっているので、歇後語であると結論付けることは困難かもしれない。つまり、比較的簡単な灯謎は歇後語と

非常に近い関係があると言える。

3－2－1. 諺について

諺についての先行研究を『諺の研究』[15]より引用する。

「諺の意義及び形式」章に、「狭義にいふ諺は、或種類の教訓、警戒、風刺、又其の他の諸類の観察経験に成れる智識をいひ表はせるもの、約言すれば、吾人の生活に関する実際的真理を発表せむことを目的とせるものの謂なりと。」[16]とある。諺は古今東西に散見されるが、中国について「之を漢土の史に徴するに、戦国遊説の士は論旨の平明易解を尚ぶより、俗諺を引き譬喩を設けて、まづ君主の耳を之に傾けしめしは、史記、戦国策を読む者の洽く知る所なり。」[17]とし、その伝統の長さを示している。

とりわけ、小説類には諺を用いることによって機智・教訓・詩趣を作品に与え、あるいは諺を借りて暗示を行うなどのレトリック上で非常に大切なものであると考える。

電子版ブリタニカ[18]では「昔から言い伝えられた風刺、教訓などを含んだ短句。その種類や目的とするところは多様であるが、概して比喩をもって人を戒めたものが多い。『下手の道具調べ』『話上手の仕事下手』のたぐいである。この例によってもわかるとおり、間接的表現をとりながらも面罵以上の効果を相手に与えることになる。」とある。

今回は古谷二夫『紅楼夢集諺―中国諺語資料（5）』[19]資料を元に、『紅楼夢』全体を照らし合わせ、ピンイン（中国語発音記号）abc 順になっているものを回数ごとに再編成し、歇後語だと判断したものを除き、見落としているものを補った。

3－2－2. 『紅楼夢』にみえる諺の特徴

歇後語がほとんど人物によって発言されたことに比べ、諺では作者（地の文、回頭：副題など）が用いている例が散見された。以下に 21 例を引く。

女子无才便是德（第 4 回・64 回）：女は学が無いのが徳である
冤冤相報（第 5 回）：仇を仇で返すことをすると、きりが無い
霽月難逢、彩雲易散（第 5 回）：雨上がりの月には出会いにくく、彩雲は散りやすい
「佳人薄命」
一龍九種、種種各別（第 9 回）：多種多様
助紂為虐（第 9 回）：紂や桀のような悪人を助けて悪事を働く
三日打魚、両日晒網（第 9 回）：三日坊主
無能者無所求（第 22 回）：無能なものは何も求めない
巧者労而智者憂（第 22 回）：巧みな者は使われ、智恵のある者は憂える
人居両地、情発一心（第 29 回）：別の所にいても、心は一つ
妻不如妾（第 44 回）：妻は妾に及ばない
投鼠忌器（第 61 回）：虎の威を借る狐
水来伸手、飯来張口（第 61 回）：水が来れば手を伸ばし、飯が来れば口を開ける
方以類聚、物以群分（63 回）：類は友を呼ぶ

清官難断家務事（第 80 回）：家庭内は複雑なので、他人が善し悪しを判断出来ない
蛇影杯弓（第 89 回）：疑い深い
人亡屋在（第 89 回）：人は亡くなったがその家はまだある
心病終須心薬治、解鈴還是繫鈴人（第 90 回）：原因を作った者が解決をする
一人传十、十人传百（第 93 回）：1 から 10、10 から 100 へと拡散する
一人拚命，万夫莫当（第 103 回）：命がけでやれば、誰も止められない
贼去关门（第 112 回）：賊が去ってから門を閉じる（手遅れ）
锦上添花（第 118 回）：錦に花を添える

作者が使用した諺には古典が出典であるような格式の高いものもあるが、現代でもよく用いられる「三日打魚、両日晒網」あるいは「一人传十、十人传百」のような、数字が入った諺もみえる。
また、『紅楼夢』の登場人物で最も口語を多用しているのは、農家の劉ばあさんだと考えられる。劉ばあさんは『紅楼夢』の中の道化役であり狂言回し役で、王熙鳳との掛け合いも多く、特に鄙びた言動が多い。そこで、劉ばあさんの発した諺を挙げる。

贵人多忘事（第 6 回）：貴人はよく物忘れをする
拔一根寒毛比我们的腰还壮（第 6 回）：髪の毛 1 本抜いても我らの腰より太い
侯门似海（第 6 回）：お屋敷は（海のようで）入りにくい
瘦死的骆驼比马大（第 6 回）：腐っても鯛
礼出大家（第 40 回）：礼は大家より出る
以毒攻毒，以火攻火（第 42 回）：毒を以て毒を制す

ここでも、現代でよく使う「瘦死的骆驼比马大（腐っても鯛）」が登場している。また、あまりにも下卑た表現で周のおかみさんから窘められた「拔一根寒毛比我们的腰还壮（髪の毛 1 本抜いても我らの腰より太い）」は、賈家の金満ぶりを農家目線で表現している。
今回の調べで、男性第 1 位は主人公の賈宝玉だった。彼の用いた諺を挙げる。

谁知盘中餐，粒粒皆辛苦（第 15 回）：皿の米は農民の苦労の結果だ
不知天多高地多厚（第 19 回）：どれほど天が高く地が厚いか（人知を超える）
亲不隔疏，后不僭先（第 20 回）：どちらが親族として血が濃いか一目瞭然
人急造反，狗急跳墙（第 27 回）：追いつめられるとどんなことでもやる
既有今日，何必当初（第 27 回）：出会いは別れの始まり
东施效颦（第 30 回）：むやみに人のまねをする
千金难买一笑（第 31 回）：千金でも一笑が買い難い
世法平等（第 41 回）：世法は平等
随乡入乡（第 41 回）：郷に入れば郷にいては郷に従え
能说不能行（第 47 回）：口先だけで実が伴わない
地灵人杰（第 48 回）：優れた人の故郷が名勝となる

井底之蛙（第 49 回）：井の中の蛙大海を知らず
各人有各人的缘法（第 49 回）：それぞれが己の道を行く
岁寒然后知松柏之后凋（第 51 回）：最も寒い季節に松柏が毅然と立つ（優秀な人）
物不平则鸣（第 58 回）：不満があるとすぐに文句を言う
卧榻之側，岂许他人酣睡（第 76 回）：自分の寝床に他人を寝かせない（領地を守る）
瞒上不瞒下（第 77 回）：上の人を欺き、下の人を侮る
和尚无儿，孝子多（第 85 回）：和尚には子がないが、弟子ならたくさんいる
冰炭不投（第 115 回）：氷と炭ではそりが合わない
一子出家，七祖升天（第 117 回）：一子出家すれば、七輩が昇天できる
真人不露相，露相不真人（第 117 回）：能ある鷹は爪を隠す

宝玉は下卑た諺はほとんど無いが、逆に他人にはすくない「东施效颦」「千金难买一笑」のような女性系が見られたことが、女の子好きな彼の性格をよく表している。また、仏教系の諺も好むようで物語の結末（賈宝玉が出家）を暗示している。

最後に、現代でもよく使われる諺を挙げていく。

顺水行舟（第 4 回、門番）：渡りに船
得陇望蜀（第 4 回）：貪欲で飽くことを知らない
掩耳盗铃（第 9 回、賈政）：自らを欺く、隠しきれないことを隠す
天机不可泄露（第 13 回、秦可卿）：天機漏らすべからず
盛筵必散（第 13 回、秦可卿）：終わらぬ宴はない
名不虚传（第 15 回、水溶）：その名に恥じない、評判に違わない
远水解不得近渴（第 15 回、秦鐘）：遠くにある水で近くの渇きはいやせない
巧媳妇做不出没米的饭来（第 24 回、賈芸）：米がなければ粥が炊けぬ
火上浇油（第 33 回、賈政）：火に油を注ぐ
藏头露尾（第 34 回、薛蟠）：頭隠して尻隠さず
睹物思人（第 44 回、黛玉）：遺品によって亡き人を偲ぶ
同病相怜（第 45 回、宝釵）：同病相憐れむ
天下无难事，只怕有心人（第 49 回、皆）：やる気があればできない事はない
旁观者清（第 55 回、探春）：岡目八目
千里姻缘一线牵（第 57 回、薛姨妈）：赤い糸
指桑骂槐（第 59 回、鶯児）：あてこする
老鸹窝里出凤凰（第 65 回、興児）：鳶が鷹を生む
井水不犯河水（第 69 回、秋桐）：分をわきまえる
纸上谈兵（第 76 回、黛玉）：机上の空談
立竿见影（第 80 回、王一貼）：効果がすぐにあらわれる
胖子也不是一口吃的（第 84 回、賈母）：塵も積もれば山となる
借风使船（第 91 回、宝蟾）：他人の力で自分の目的を達成する

猫鼠同眠（第 99 回、賈政）：呉越同舟
移花接木（第 109 回、宝釵）：上手にすり替える
魯鱼亥豕（第 120 回、曹雪芹）：漢字の書き間違い
刻舟求剣（第 120 回、曹雪芹）：時の移り変わりを守らず旧態依然としている

3－2－3. 諺の話者

次に、諺の話者について考察してみたい。下表は今回得られた 259 例を話者ごとに分類したものである。全体は「女 2：男 1」の割合となっており、その中で王熙鳳（27 例）が群を抜いて多く、全体の 10％強を占める。次に目立つのは男主人（48 例）である。また、歇後語と異なり、お喋りな印象の賈宝玉（21 例）・林黛玉（15 例）・薛宝釵（14 例）が印象通りの数であったこと、「作者」が 21 例と比較的多いことが分かる。

女主人	贾母 7	王夫人 9	秦氏 7	金桂 3	王熙凤 27	宝钗 14	黛玉 15	湘云 3	尤三姐 3	其他 15
女老人	婆子 2	赵姨娘 3	劉姥姥 6							
女中	鸳鸯 4	平儿 7	袭人 3	司棋 6	紫鹃 6	宝蟾 3	麝月 3	彩霞 1	香菱 1	其他 8
女其他	老尼 1	妙玉 1	其他 4							
男主人	贾政 10	贾珍 1	贾琏 7	贾蓉 3	贾宝玉 21	薛蝌 2	薛蟠 1	秦鐘 1	賈芸 2	
男小者	焙銘 1	林之孝 1	興児 4	李十儿 3						
男其他	冷子興 1	代儒 2	王一貼 1	門子 1						
其他	众人 7	作者 21	詩 2	焦大 1	其他 3					

3－2－4. 王熙鳳が用いた諺

下表で得られた王熙鳳が用いた諺を示す。

	中国語	和訳
第 6 回	朝廷还有三门子穷亲	天子さまにも三軒は貧乏な親類
第 11 回	天有不测风雨，人有旦夕祸福	天に思わぬ雲が出る、人の禍福の定めなや
	心到神知	真心のあるところ人にぞ通ずる
	知人知面知不心	人は見かけによらぬもの
第 16 回	人家给个棒槌，我就那着认作针	人から洗濯棒を見舞われても、針だぐらに思う血のめぐりのわるさ
	指桑骂槐	桑を指しておいて槐をあてこする
	没吃过猪肉，也见过猪跑	豚肉の味は知らずとも豚の駆けるは見ている（門前の小僧習わぬ経を読む）
第 21 回	新婚不如远别	貰いたてより旅帰り
第 43 回	丁是丁，卯是卯	黒は黒、白は白
第 45 回	酒后无德	酒癖のわるい
第 46 回	拿草棍儿戳老虎的鼻子眼儿去了	草の茎を虎の鼻の孔へ突っ込むようなまね
第 55 回	骑上老虎	虎の背に騎ってしまったも同然
	不干已事不张口，一问摇头三不知	隣のことには口出さず、一度聞かれて三度白きる
	笑里藏刀	笑顔つくって短刀を呑む
	擒贼必先擒王	賊を生捕るには首領から
第 67 回	天里良心	天の道理、人の良心もないものだわ

	中国語	和訳
	眉头一皱，计上心来	眉根をきりりと寄せて、腹が決まったかのように
第 68 回	妻贤夫祸少	妻賢しければ、夫禍少なし
	表壮不如里壮	見かけの強さより蕊の強さ
	不知天有多高，地有多厚	さような礼はついぞ聞いたことがない
	拚着一身剐，敢把皇帝拉下马	八つ裂きの刑にあう身は、天子さまでも馬から引きずりおろす（窮鼠猫を噛む）
第 69 回	剪草除根	禍の種を絶やす
	指桑骂槐	桑を指して槐をあてこする
第 72 回	袖手旁观	高見の見物
第 74 回	打牙犯嘴	ふざけあい
第 83 回	人怕出名猪怕壮	人は名の出るのを恐れ、豚は肉のつくのを恐れる（出る杭は打たれる）
第 88 回	含着骨头露着肉	奥歯に物の挟まったような言い方

王熙鳳が用いた諺の特徴としては、「指桑骂槐」「剪草除根」「袖手旁观」などの、よく使われるものもあるが、「知人知面知不心」「没吃过猪肉，也见过猪跑」「笑里藏刀」「擒贼必先擒王」「人怕出名猪怕壮」「含着骨头露着肉」などの字面がおどろおどろしいものが比較的多くみられる。これらも普段から「いざ」という時に口をつくように、日頃からボキャブラリーを増やして戦略的に使用しているのだと言えよう。

4．結論

それでは、王熙鳳はなぜ歇後語・諺を多用しているのだろうか。その理由を２つ挙げる。それは「文盲説」と「血統環境説」である。

まず、文盲説から考察する。王熙鳳は王家のお嬢さまから賈璉へ嫁した。彼女には立派な「熙鳳」という学名が付いている割には文字が読めない「文盲」という設定になっている。そして、これまでみてきたように「口八丁手八丁」が彼女のキャラクターである。読書による言語構築がなされなかった彼女が、いかにして口八丁に育ったのだろうか。それは「お嬢さま」がキーワードとなろう。お嬢さまの周囲には女中や婆やが大勢取り巻いている。封建社会において、これらの身分の低い人々と日常的に接触していたことが、彼女らの言語習慣に親和性を持ったと考えられる。『紅楼夢』に登場する林黛玉・史湘雲らもお嬢さまであるが、彼女らは「文字が読める」という共通項があるゆえに、歇後語の話者としてはほとんど目立っていない。つまり、王熙鳳の口八丁という形象は「文盲」と深い関係があり、身分の低い者が多く用いる歇後語や諺をまね育った結果なのではないだろうか。

また、本邦でも江戸時代まで厳然とした身分制度があり、士族の子弟は文字の習得をし、武士道精神から「孝」を重んじて言葉遣いにも厳しかった。彼らに比べると江戸の市中や周辺に住む多数の「農・工・商」階層に属する人々は、商売上の手習い程度の事はするが、口頭語を主として用いていた事は周知である。このように、王熙鳳は文盲のお嬢さまだったから、歇後語や諺の話者として目立っているのだと考えられる。[(20)]

もう一つの「血統環境説」は、王熙鳳の実家である王家の人々が歇後語や諺を比較的多く用いて

図１　賈家世系図（全図）：伊藤漱平訳『紅楼夢』上、附録

賈家世系図（付王・薛・史・林四家略系図）

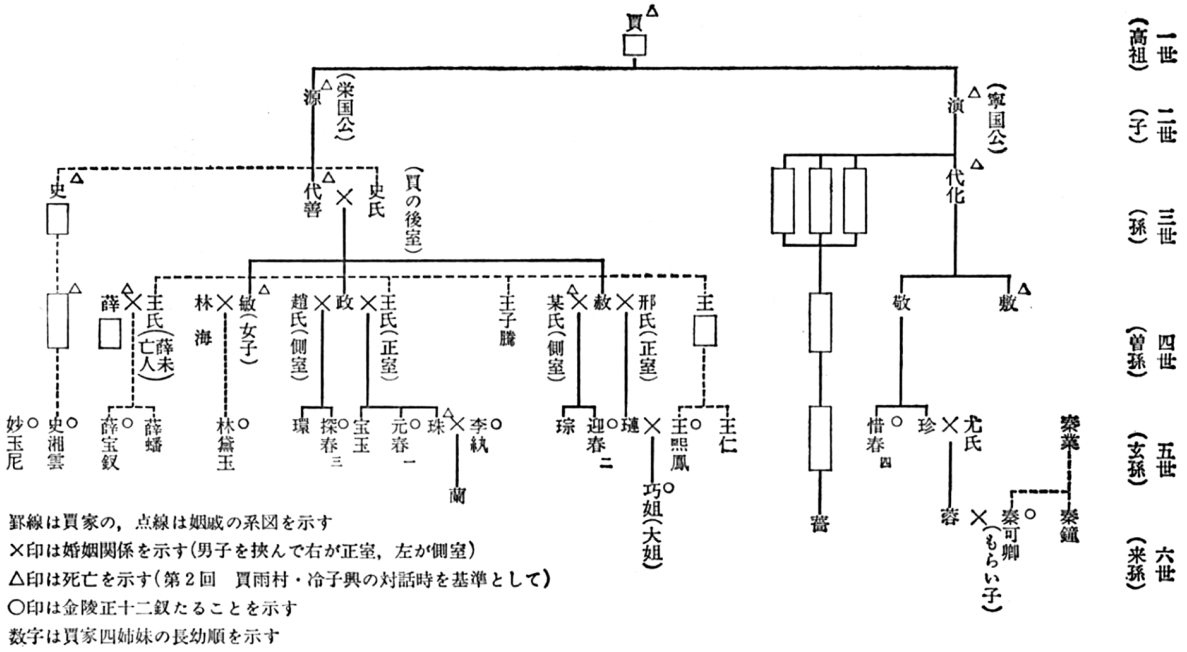
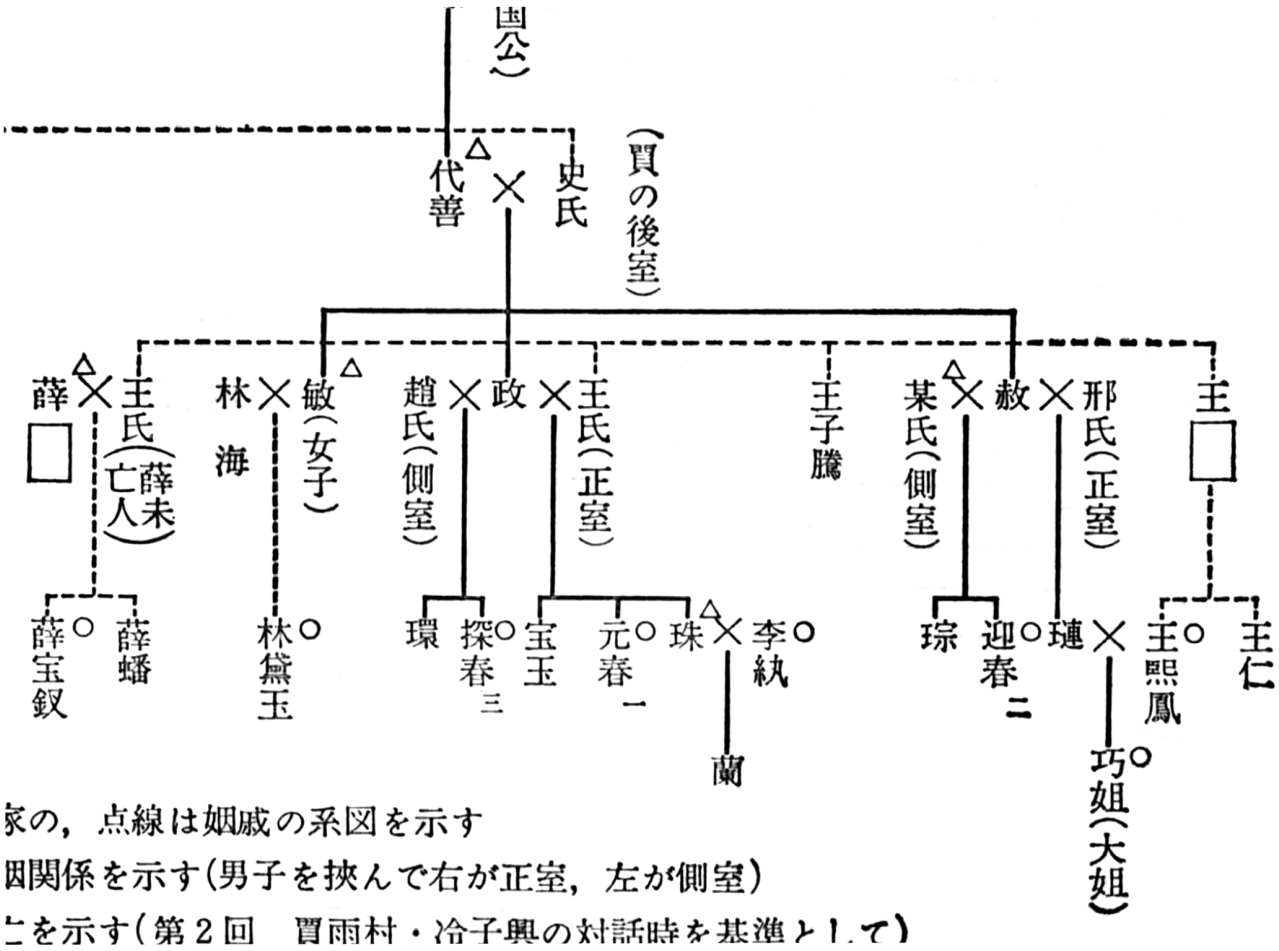


図２　賈家世系図（部分、拡大図）：伊藤漱平訳『紅楼夢』上、附録



いるという事である。先に挙げた表にみえる通り、女主人筋では王夫人（賈政に嫁し、賈珠（カシュ）：早世／賈元春（カゲンシュン）：宮中で貴妃になる／賈宝玉：主人公、の3人の母）が5例、薛宝釵（母親が王夫人の妹）も5例みられる。むろん王熙鳳に比べると少ないが、それでも王家関係者だけで38例となって女話者の半分を占めている。薛宝釵という人物は、文字は読めるし詩詞も作れる才女だが、自ら言っているように「やはり糸を紡いだりお針仕事をしたりするのが、おたがいの本分ですもの（第37回）」という考え方である。思うに、王家の血統あるいは環境が歇後語・諺の出やすい家柄だったのではないだろうか。

以上のように、文盲お嬢さまで王家出身だから歇後語・諺を多用したと指摘したが、さらに王熙鳳自身が持つ「自己顕示欲」というキャラクターを抜きには考えられないので、ひとこと付け加える。斎藤良輔は「“しゃれ”を自由に、うまくつかいこなして、周囲の人たちの話題の中心になりたい、という自己顕示欲」を指摘しており、[21]王熙鳳の性格はまさにこの通りである。いつも皆から注目されたい、目上の人から可愛がられたい、という感情が強い人物なのである。ゆえに自然と身に付けた歇後語がポロリと出る、というレベルではなく戦力的に「いつかこの歇後語をつかってやろう」と虎視眈眈と狙ってさえいる。実際に彼女が使った第30回の「黄鷹抓住了鹌子的脚－亲密不可分」（大鷹がはい鷹の脚をひっつかみ―親密）は、賈宝玉と林黛玉が仲違いして周囲が気を揉んでいる際に出た彼女の歇後語であるが、周囲から「そんな言い方があるのかしら？」と感心されている。深刻な場面を笑いに変えることのできる頭の回転と、一風変わった喩えに屋敷の皆はホッと安堵の胸をなでおろし、心中王熙鳳を称えるのである。

次に、「第68回問題」について考察を行う。歇後語・諺ともに、第68回における使用が突出して多かった。その理由は以下の様に考えらえる。

第65回～第69回は『紅楼夢』における「作中作」である。（注で回頭：副題を挙げる）[22]王熙鳳の夫賈璉がこっそりと妾（尤二姐）を作り別宅へ隔離した。そのことについて賈璉の付き人である興児（コウジ）は「人家是醋罐子，他是醋缸、醋瓮。」（人がさしずめ酢瓶だといたしましたら、あちら（王熙鳳）は酢甕の中の大酢甕といったところでございましょうよ。[23]：第65回）、と王熙鳳を酷評し注意を促したにもかかわらず、言葉巧みに賈璉の留守に王熙鳳の屋敷へ引っ越しさられる。そうした上で、尤二姐のかつての婚約者（張華）を焚き付け婚約不履行で訴えさせ、さらに国喪・家喪中に婚約者がいる身で尤二姐を娶ったと大騒ぎをし、周囲の人々に「王熙鳳が取り乱すのも当然だ」「気の毒に」という気持ちにさせることに成功するのである。結局、孤立無援で進退窮まった尤二姐は生金を呑んで自殺してしまう。この間の王熙鳳の言動 ― 特に歇後語・諺の多用 ― は練りに練った成果である。このプロットは『金瓶梅』の毒婦潘金蓮（ハンキンレン）の影響であると船越は指摘している。[24]

また、李希凡が「中国の伝統的な観念に『不孝有三、無後為大（不孝に3種あり、子の無きが最大）』」があり、封建貴族の家庭では自然と家族の連続が重視されている。[25]」（和訳は池間、原文は注）と指摘しているように、王熙鳳の唯一にして最大の弱点が男児に恵まれないことだった。第68回では尤二姐が妾とはいえ男児を生めば立場が逆転する危うい場面であり、後に点綴されているが、すでに尤二姐は身籠っていたようである。ゆえに、王熙鳳の嫉妬の焔は激しさを増して、頂点に達していたのだ。そこで、相手を完膚なく罵倒すべく、酷い言葉を投げかけたのだと想像できる。

以上のような理由から、今回抽出した王熙鳳が使用した歇後語11・諺4の合計15は、第68回

で集中的に用いられているのである。

最後に、前80回と後40回の作者問題について述べる。

「はじめに」の注5で触れたように、『紅楼夢』成書過程において今2つの議論がある。それは“一稿多改（一人の作者が何回か稿を改めた）”といわれる、曹霑の手になった作品が数回リライトされたという立場であり、いま一つは“二书合并（前後の作者が異なり、出版に際して合体された）”といわれ、後半三分の一が失われたが、続作者が前80回の伏線を撤収する形で続作した、というものである。ベルンハンド・カールグレン（1889年－1978年）は38語の調査により「前後同一説」を提示した。一方、池間の調査（色彩・語り手・畳語）ではまだ明確な結論が出ていないものの、少なくとも畳語においては後40回続作説を後押しするデータを得た。

そこで、今回の「歇後語・諺」の使用について見てみると、全体で321例、前80回は249例（77.6％）：後40回は72例（22.4％）であった。後40回を2倍率にしたとしても明らかに前80回に偏っている。ゆえに、今回の調査では“二书合并”すなわち続作説を支持するという結果になった。

本稿では『紅楼夢』にみえる王熙鳳の形象を歇後語・諺の使用という観点から観察し考察した。当初の予想通り、どちらも王熙鳳は戦略的に大量に使用していることが確認できた。そして、この口語使用の特徴が彼女の形象と深く結びついていることを指摘し、続作者問題においては「歇後語・諺」使用が前80回に集中しているため、続作者の存在を肯定する結果となった。

本稿発表の機会を与えて下さった山本賢二先生へ、長き間に頂戴した学恩の御礼と、古稀の御祝を申し上げる。

注

（1） 渋井君也（2019：109-118）「日本におよび中国における『源氏物語』と『紅楼夢』との比較研究について」、文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要50

同論文によると、日本における比較研究は13本、中国における比較研究は「汎論的な研究」が23本、「人間描写の比較研究」が35本、「その他の比較研究」が22本、と説明されている。そのほとんどが1980年以降の論考である。

（2） 文学作品から影響を受けた作品を研究するものをフランス学派といい、直接的な影響がないが類似点があるものを研究する立場がアメリカ学派である。

（3） 中国5大小説とは、『西遊記』『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』『紅楼夢』である。

（4） 講談の台本として宋代から「話本小説」という体裁の出版物が盛んに出版され、明清代に『西遊記』『水滸伝』などが章回小説として歓迎され、『水滸伝』のスピンオフ作品として『金瓶梅』が出現した。その影響によって『紅楼夢』も120回の章回小説として構想されたと思われている。

（5） 1950年代にカール・グレンの調査によって「前後同一作者説」が掲げられたが、日中では依然として「前後別作者説」の議論がある。池間もこの問題についてすでに「小説『紅楼夢』の色彩語について」（2012年3月、流通経済大学社会学部論叢22－2号）論文、「『紅楼夢』における語り手の問題―前80回と後40回の文体に注目して―」（2017年6月、日本文体論学会での口頭発表）、「『紅楼夢』における畳語使用について―前80回と後40回の文体を中心に―」（2019年3月、日本文体論学会『文体論研究』第

65 号）論文において発言をしている。

（6）　歌合・句合などで、判者が歌や句の優劣・可否を判定して述べることば。はんことば。はんのことば。ここでは『紅楼夢』第 12 回で示される各自の結末を示す。

（7）　https://zh.wikipedia.org/2019 年 4 月 23 日アクセス

「王熙凤是《红楼梦》中主要的人物，贾琏正妻、巧姐生母，亦是贾宝玉堂嫂及表姐。别称凤辣子，又称琏二奶奶，是荣国府的实际当家人。周汝昌认为《红楼梦》故事情节有两条大脉路，一条以宝玉为中心，一条以王熙凤为中心。」

（8）　新華書店（1983：134-147）「王熙鳳論」

（9）　前掲書『紅楼夢人物論』、p.135「在中国古典著作中，不容易找到如此紧张强烈的腕力写成的人物典型」

（10）　前掲『紅楼夢人物論』、p.136「作者刻画出一个聪明、漂亮、能干、狠毒的凤辣子」

（11）　船越達志「王熙鳳の形象」（1999：498-502）『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』、白帝社

（12）　池間里代子（2014：45-60）「『紅楼夢』の歇後語について」、『文体論研究』第 60 号

（13）　马经义（2007：38）『中国红学概论』上冊、四川大学出版社

（14）　①第 1 回、甄士隠と賈雨村が元宵節で酒盛りをし、その翌年雑踏で一人娘の英蓮が失踪した。後に薛蟠に妾として買われ、様々な苦難の末に正妻となる。

②第 17・18 回、賈元春が大観園へ元宵節に省親した。

③第 22 回、賈元春の提案で皆が灯謎を作る。

④第 53・54 回、大観園で盛大な元宵節をおこなった。

（15）　藤井乙男（1929：2-4）『諺の研究』進文堂書店

（16）　前掲書『諺の研究』pp.12-13

（17）　前掲書『諺の研究』pp.3-4

（18）　ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 https://kotobank.jp/word/%E8%AB%BA-65622

2019 年 6 月 24 日アクセス

（19）　古谷二夫（1975：215-229）「紅楼夢集諺―中国諺語資料（5）」、『中京大学教養論叢』中京大学学術研究会 15 巻 4 号（29 号）

古谷は「三言二拍」（明代通俗小説）・水滸伝／水滸後伝・元曲選に続くものとして紅楼夢を素材として諺を収集した、とはしがきにある。

（20）　この問題については、すでに日本文体論学会口頭発表において、大阪学院大学の近松明彦教授より「てよだわ」言葉の存在を示唆され、中村桃子（2012）『女ことばと日本語』岩波文庫をはじめとする資料を読んでいる最中である。乞待稿。

（21）　斎藤良輔（1986：235）『しゃれの世相学―言語遊戯ソサイエティー』未来社

（22）　第 65 回：贾二舍偷娶尤二姐　尤三姐思嫁柳二郎

第 66 回：情小妹耻情归地府　冷二郎一冷入空门

第 67 回：见土仪颦卿思故里　问秘事凤姐讯家童

第 68 回：苦尤娘赚入大观园　酸凤姐大闹宁国府

第 69 回：弄小巧用借剑杀人　觉大限吞生金自逝

（23）　中国語で「女性の悋気」を「吃醋（酢を飲む）」という。注 21 で挙げた第 68 回の回頭（副題）にも「酸凤姐大闹宁国府」とみえる。

(24) 前掲、船越達志「王熙鳳の形象」、p.502

(25) 东方出版中心『李希凡文集（第二卷）－『红楼梦』人物论』(2014：236)「在中国的传统观念里，“不孝有三，无后为大”，封建贵族之家自然更重视所谓家族香火的延续。”」

参考文献

1996 年 7 月『「红楼梦」的语言』、北京语言学院出版社

1987 年 12 月『红楼梦辞典』、广东人民出版社

1988 年 2 月『红楼梦人物论』、贵州人民出版社

1986 年 7 月『红楼梦的背景人物』、辽宁大学出版社

1986 年 10 月『「红楼梦」辞典』、山东文艺出版社

1988 年 5 月『红楼梦鉴赏辞典』、上海古籍出版社

1985 年 8 月『「红楼梦」的语言艺术』、语文出版社